

## 断種法史上の人びと(その六)

— 成田勝郎・付菊地甚一 —

岡田靖雄

1

成田勝郎とであったのは、精神衛生雑誌『脳』第一三巻第四号(一九三九年)に、「断種論」葬送譜」と題する文章をみたときであった。そのうち呉秀三先生につき齋崎轍の話を書いたときに、成田のことがでてきた。つづいて、精神科医療史研究法で南孝夫に(一九八九年)、また懸田克躬に(一九九一年)に話をうかがったとき、成田につきかなりくわしくかたられた。そのうち、娘の服部芳子およびその夫服部清から、また息成田一郎から父につきうかがった。さらに小峯和茂の協力もえて、成田の主要著作をあつめることができた。

2

成田勝郎は、一八九四年(明治二十七年)一月一七日新潟県三条市に成田八十一・フジの子として生まれた。八十一は村上藩士佐藤孫七の子で幼名榮助。数理をこのんで関孝和流の和算をまんだ。改名した八十一も九・九一八一にちなむものであった。のち成田フジと結婚し成田家の名跡をついだ。教育者であった。勝郎の数学好き、物理学好きは父の影響で

あった。

三条中学校、第四高等学校をへて東京帝国大学医学部に入學、一九二〇年(大正九年)一二月にそこを卒業した。同級の精神科医には大熊泰治、内藤好文が、他科医では颯田琴次、福田保がいる(名簿で前後数年の人をみると、わたしの在学中またそのすこしあとに定年をむかえた東京大学医学部教授が目につく)。翌年三月には呉秀三教授のもとに東京帝国大学助手となり、つづいて一九二二年七月一日から一九二三年三月二六日まで東京府立松沢病院医員としてつとめた。

少年法は一九二二年四月二〇日に公布され、翌年一月一日から施行された。少年保護問題の重要性を感じた呉教授にすすめられた成田は一九二三年(大正十二年)三月に矯正院医官、多摩少年院第三課長となった、日本で最初の矯正院医官であった。成田は生涯少年問題ととりくむことになる。より新鮮な不良少年をみたくて、翌年七月には東京少年審判所医務嘱託となり、一九二六年一〇月から私立加命堂病院医員をかねた。この間一九二五年には、呉が定年退官し、三宅鑽一が後任教授となった。一九二五年五月には、多摩少年院東京出張所医務嘱託、東京少年審判所少年保護司事務嘱託。一九三六年には三宅が定年退官し、内村祐之が後任教授となり、また三宅のもとに脳研究室が開設された。

一九四六年(昭和二十一年)七月東京少年審判所少年審判部長嘱託。また戦後は高井戸の家庭学校で遮断療法を実践していた。一九四八年五月少年保護司。一九四八年七月一五日に

公布された改正少年法は一九四九年一月一日から施行された。そして成田は一九四九年(昭和二十四年)四月に法務技官、東京少年鑑別所長に任ぜられた。一九五四年一〇月一八日東京少年鑑別所完工の日、病床にあった成田は礼服をつけて臥床していた。一〇月二一日東京都練馬区仲町の官舎で肝がんにより死去した、五九歳。

その学識経験をもって少年法改正に寄与した成田は、少年鑑別の父、「ネリ鑑」をひらいた男と称されていた。

## 3

「性格の本態(従って精神の本態)に関する一仮説」(二二回)(一九三三—一九三五年)、「精神軌道学」(一八回)(一九三六—一九三七年)、「変質可変の実験的証明の顛末」(七回)(一九三七—一九三八年)、「精神病学の再建を目指して」(七回)(一九三六)など、かれの主要論文は『脳』にかかっている。学術論文の体裁をとっているのは、『矯正医学会雑誌』にのった南孝夫ほかとの共著「脳波による非行少年の鑑別診断」(一九五四年)だけのようである。

一九五五年にでた『矯正医学会雑誌』第四巻特別号(遺稿集)には、「少年保護の歩み」、「東京少年鑑別所運営上の根本原理について」、「遮断処置について」がおさめられている。そのほか『少年保護』に論文をいくつかかいている。

その文章は自分もみとめているように冗長で、数学、物理学の援用がおおく、またかなり攻撃的である。サツとよんで

いつては理解しにくい。

かれの学説をうけついで人としては、二代目の東京少年鑑別所長となった齋崎轍(一八九九—一九八四)、のちに大正大学教授となった心理学者長谷川孫一郎、成田の助手をのち早稲田大学教授となった服部清(一九二四—一九九三)などがある。

齋崎は成田の所説を整理しすぎたともされるが、齋崎にしたがって成田学説の二主要点を紹介しておこう(「いつか自分の目でよみとった成田学説のまとめをしてみたい」)。

一般にいわれる精神現象は、我 IOP(人文科学の対象)、精神 Geist(人文科学の対象)、心情体 Psyche, Seele(いきっている実体、エネルギーで自然科学の対象)からなる。心情体には心情基層、心情内層、心情外層がある。脳器質疾患、精神薄弱は心情基層病であり、いわゆる内因精神病は心情内層病に相当し、神経症、不良行為、少年非行は心情外層病である。成田らがつくった性格特徴問診法を齋崎が改良した心情質微標問診法はある時期矯正施設でかなりひろく利用されていた。抑うつ性、無力性、過敏性、強迫性、自己不確実性、内閉性、粘着性、意志欠如性、即行性、不安定性、気分易変性、顕示性、爆発性、爽快性の心情質微標が、その程度に応じ扇状に表示されるものである。

遮断療法は、隔離による少年の観察からあみだされたものである。それは、ある期間の隔離・刺激遮断につづく刺激(メンタルワーク)注入からなる。人生観などをいれない点

で、森田の提唱した臥褥療法とはことなるとされる。懸田も遮断療法の効果をたかく評価しながらも、これを追試してくれる人のいないことをなげいていた。

4

では、成田の断種法批判はどのようなものであったか？

「断種法制定に関して私は可否関心そのものを始めから全然持たなかった」とかれ自らがかいている。少年問題に没頭していれば地下潜行していたかれの目を断種法にむけさせたのは、「指導会事件」である。

日本少年指導会は東京少年審判所管内の一保護団体であったが、この会の橋本勝太郎（陸軍中将）およびおなじく教化研究部主任の吉益脩夫（一九二四年卒業、脳研究室所属）が、一九三六年五月一六日に「少年不良化予防対策としての断種論」を発表したのである。これは少年保護を否定する身内の反乱ととられた。東京少年審判所は成田に事件解決を依頼したが、成田の調停はならなかった。

そこで成田は精神軌道学実験をおこなうことになる。新聞記者が「変質可変実験」とよんだ第一実験は、精神薄弱をもなう一三歳の精神変質（精神病質）少年を対象とするものであった。一九三七年四月六日から一五日までに三回、五月一二日から一八日まで三回の実験がおこなわれた。これは、はじめの状態が刺激遮断をへてどう変化するかたしかめるもので、実験は成功した。つまり、遺伝で不変とされた変質が

状態変化をしめたので、それが断種の対象とされるべきではないことが証明された。五月の実験には三宅もたちあつて、その変化を確認した。六月五日にでた『日本医事新報』第七六九号は、「断種法反対の科学的論議」を報道した。六月二一日披露宴がおこなわれた成田による精神衛生研究所創立準備会には、橋本、吉益も参加していて、二人はこのうち不良少年断種の主張はしなかった。

第二実験は、一六歳の精神分裂症（精神分裂病）（緊張病型）の少年を対象として一九三八年一月八日から一九日までおこなわれ、心的異常の実態がほぼあきらかにされ、実験は成功した。

精神薄弱の人を対象とする第三実験は一九三八年夏に公開試行を予定されていたが、これは成田の文化的暗殺により中止となった。これにつき成田は「精神病学が意識的に文化的暗殺具として用ひられた」としかのべていないが、成田は精神病（パラノイアなど）だとの噂がながされたらしい。

さて、「断種論」葬送譜は「精神病学の再建を目指して」の第二章として『脳』の第一三巻第四、五、六、七、九号（一九三九年）のつた（「精神病学の再建を目指して」は、この第二章までで未完）。ここで成田は、精神病学は脳病学によることよつて一部地動説にはいつているが大勢はまだ天動説の時期にあつて、SeinでなくてSollenが、学理でなくて教理が支配専制している、とし、命をあらかじめた断種は生命のための医学ではなくて死学、殺学である、国策要求からの

断種論議は謝絶して、心的 Self 探究を一步でもすすめるべきだ、と主張する。「恩師」である三宅を「教主」とまでいいきっている。

ともかくも、一九四〇年の国民優生法には不良少年断種はもりこまれなかった。

菊地甚一（一八八七—一九五一）は、『脳』の編集にあたっていて、成田をささえた人である。山形県にうまれた菊地は済生学舎にまなんで一九一四年医師免許を取得。一九一五年と巢鴨病院医員。のち大塚に開業し、司法精神鑑定をよくしていた。精神鑑定を依頼された人の無実を証明したこともある。また日本犯罪学会の運営にあたり、司法精神鑑定に関する著書も数冊ある。かれは『脳』に、断種法に関する小論文をかいていて、それは『断種法問題小論』（一九三八年）にまとめられた。かれは強制断種につよく反対し、階級性をとりあげ、ナチスを批判している（論文にみずから×××を使用）。精神病は遺伝だけできまるものではない、精神病になつたらまず療病処置が考慮されるべきだ（治療学としての精神病学はまだわかり）、対象者をきめる手続きが問題だ、というのが、かれの断種法反対の主要点である。

（平成十五年一月例会）

## 江戸幕府寄合医師添田玄春の医学と医療活動

深瀬泰 旦

### 「添田玄春日記」

順天堂大学山崎文庫には「添田玄春日記」七冊が収蔵されている。嘉永元年（一八四八）から元治二年（一八六五）までの一六年にわたる添田家の日記であるが、現存するのはわずか八年にすぎない。これは添田家の執事の筆になる日記で玄春自身による記述ではないので、玄春の社会的言動や感想、心の動きはしるされていない。その反面玄春をはじめとして、雇人の細々として行動まで詳細に記されているという別の一面もあつて、添田家の客観的な状況をしるにはかえつて有利であるという利点もある。本例会では添田玄春の医学と医療活動について報告した。

### 玄春の出仕先

この日記から玄春の出仕先をみると、嘉永元年から安政五年までは多紀氏主宰の幕府「医学館」であり、安政六年には、お玉ヶ池「種痘所」となり、文久三年から慶応元年までは種痘所が改称された「医学所」である。

それぞれの年においてもつとも注目すべき出来事をあげると、嘉永元年に玄春は二三歳で父の死後家督をついで小普請医師となり、医学館に出仕した。嘉永三年には医学館薬品会